歴史文化のまちづくり

Ⅰ章　久留米市の歴史文化の特徴

1．久留米市の概要

（1）地理・自然環境

1）久留米市の位置・面積

本市は、福岡県の南西部、東経 135 度 30 分、北緯 33 度 19 分に位置し、九州島の東西と南北を結ぶ交通路が交差する筑紫平野の中央に広がっています。九州の中心都市である福岡市から南へ約 40km、東はうきは市、西は佐賀県、南は八女市･筑後市･大川市･八女郡広川町･三潴郡大木町、北は朝倉市と小郡市・三井郡大刀洗町と接しています。

市域は、平成 17 年（2005 年）２月の近隣４町（田主丸町、北野町、城島町、三潴町）との広域合併により拡大し、東西 32.27 ㎞、南北 15.99 ㎞、行政面積は 229.96k ㎡の福岡県の 4.6%、県下第５位の面積を占めています。

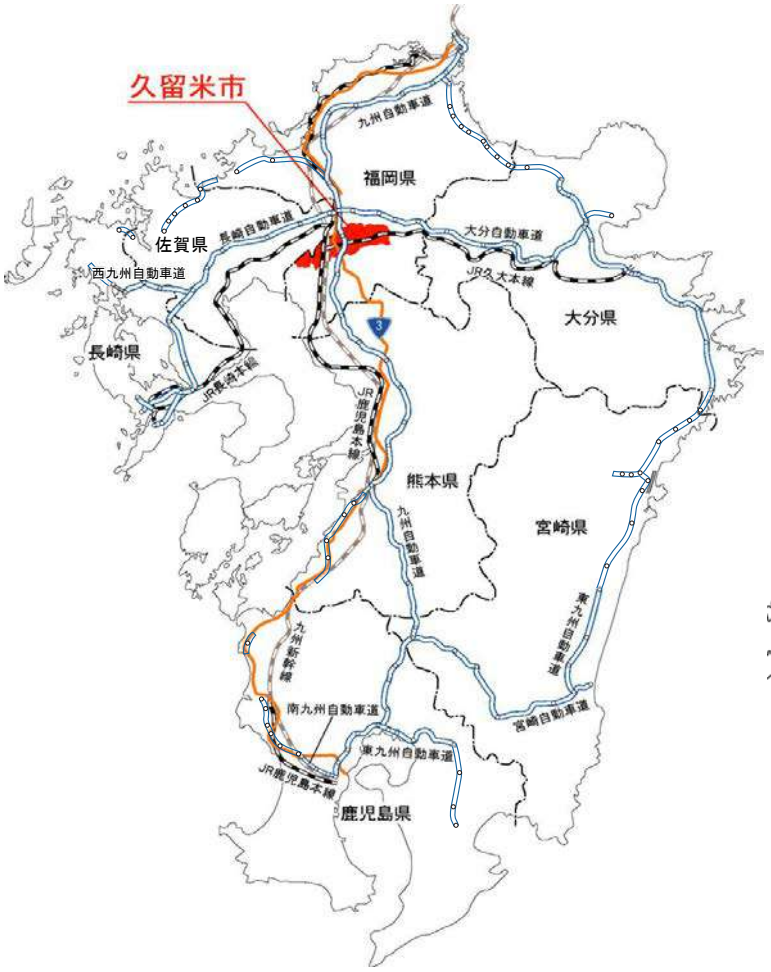


図　久留米市の位置
（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

図　久留米市と周辺市町

2）地形・地質

本市は、九州一の穀倉地帯である筑紫平野の中央に位置し、市域に沿うように筑後川が流れています。南東部には耳納山地が東西に連なり、その西端には高良山や明星山などの山々が聳えています。耳納山地北麓では扇状地が複合的に発達し、西へは緩やかな丘陵や低位段丘が延びています。筑後川によって形成された広大な沖積平野には、自然堤防や氾濫原となった平坦地が広がり、南西部の下流域にはクリーク地帯が広がっています。ここでは、本市固有の地形や地質について述べることにします。

①筑後川

筑後川は、熊本県の阿蘇外輪山に源を発し、大分県内で小河川を吸収しながら大河へと成長していきます。福岡県内に至って広大な筑紫平野を形成し、久留米市街地の北西付近（久留米地峡部）で流れを南西へと転じ、福岡・佐賀県境を曲流しながら有明海へと注ぐ全長 143 ㎞、流域面積 2,860k ㎡の九州地方最大の河川です。市内には宝満川、巨瀬川、高良川など 47 本の一級河川が流れていますが、これらは全て筑後川水系です。

筑後川と耳納山地

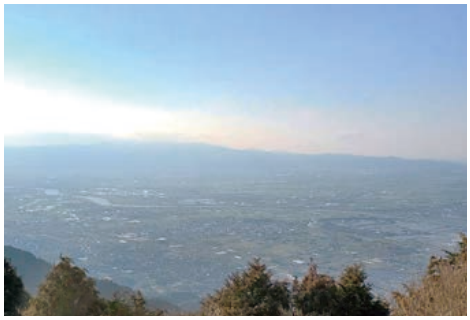
②クリーク地帯

筑後川下流域には、筑後川が蛇行を繰り返した平坦な沖積地が広がっています。筑後川の旧河道や河跡湖を耕作地へ変え、農地を広げていくためには用排水が不可欠で、この地には溝渠が発達しました。城島町や三潴町の西部には溝渠であるクリークが張り巡らされ、全国有数のクリーク地帯として独特の景観を形成しています。

城島町のクリーク

③筑紫平野

筑紫平野は九州最大の平野で、筑後川中下流域に形成された沖積平野です。筑後川左岸を筑後平野、右岸の佐賀県側を佐賀平野と呼び、筑後平野は久留米地峡部を境に、上流側が両筑（北野）平野、下流側が南筑平野と呼ばれます。筑紫平野は完新世の初期（約 1 万年前）は存在せず、現在の標高 10 m付近までは海岸線となっていました。弥生時代（約 2,200 年前）以降、筑後川やその支流である宝満川などによる中小河川の沖積作用により、九州最大の平野が形成されていきました。農地が広がる恵みの大地であるとともに、市民が暮らす生活の舞台でもあります。市域東部の耳納山地北麓付近や南西部には、古代条里制の名残が良好に残っています。


筑紫平野

④耳納山地

耳納山地（山本町付近）

市域南東部に位置する耳納山地は、うきは市方面から東西約 30 ㎞にわたり連なり、東に聳える鷹取山（802 m）を最高所とし、発心山（698 m）、耳納山（368 m）、高良山（312 m）と西へ行くに従い比高を減じ、西方へは市街地が発達した低位段丘が派生しています。北麓には耳納山地に沿うように水縄断層帯が走り、耳納山北麓に「屏風山」と言われる急峻な傾斜面を形成しました。「耳納」は「水縄」とも表記されますが、稜線が水縄を張ったようにまっすぐなところから名付けられたとも言われ、独特の景観を形成しています。

山岳部の大部分は砂質準片岩、泥質準片岩、緑色準片岩、緑色片岩などからなる古生代の筑後変成岩を基盤とし、東部の一部には花崗岩地帯も見られます。台地を構成する新生代砂礫層は耳納山地北麓と南西付近に分布し、同時代の頁岩、砂岩、凝灰岩は西側に認められます。

⑤水縄断層

耳納山地北麓には、山裾を縫うように東西約 26km にわたり、水縄断層帯が位置しています。市街地東側の合川町付近から田主丸町を経て、うきは市に至るこの断層帯は、『日本書紀』天武 7 年（678 年）12 月条に記載がある筑紫大地震を引き起こしたと考えられ、発掘調査が行われた山川前田遺跡は、水縄断層の名称で国の天然記念物に指定されています。市内各所で行われる発掘調査では、地割れや噴砂の痕跡が確認されることも多く、水縄断層帯の活動による影響が、広範囲にわたっていることが明らかになっています。

なお、本市では、地震の観測が開始された明治 38 年（1905 年）以降、平成 17 年（2005 年）の福岡県西方沖地震まで、震度 5 以上の地震の発生が 1 度もありませんでした。しかし、平成 28 年（2016 年）の熊本地震では震度 5 強を記録するなど、近年は近隣での地震活動が活発化している傾向が窺えます。水縄断層帯が活断層であることを踏まえ、本市においても大規模な地震災害への備えが急務となっています。

天然記念物水縄断層（山川前田遺跡）の地割れ

水縄断層（山川前田遺跡）

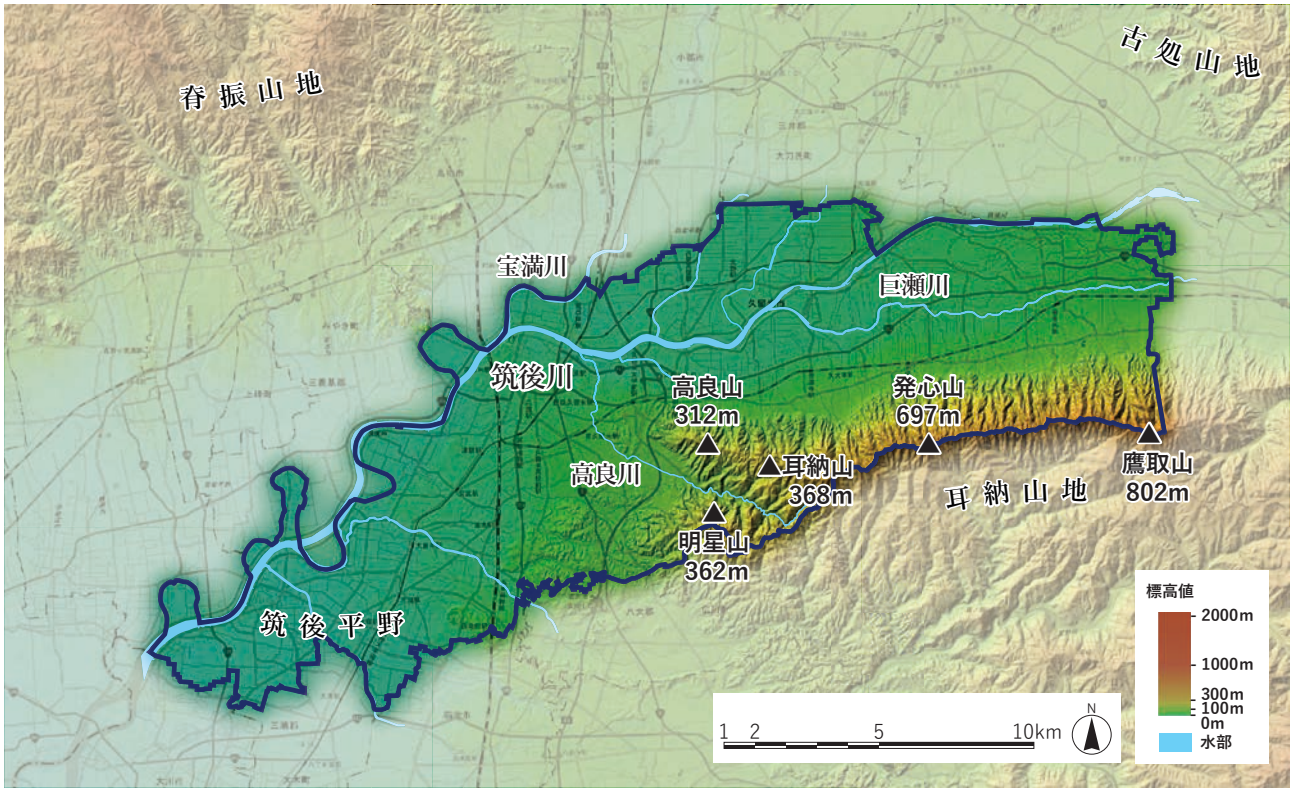


図　久留米市の地形（地理院地図（電子国土 Web）色別標高図、陰影起伏図、標準地図　一部改変）

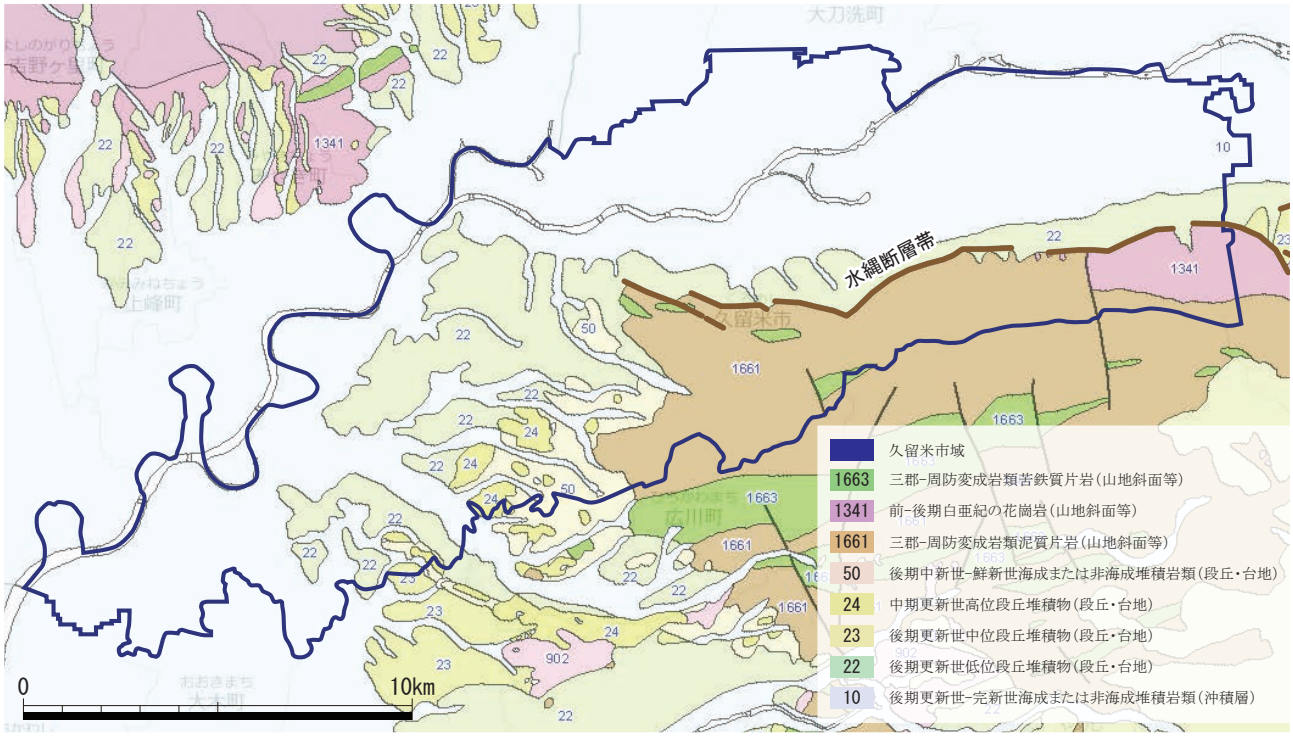


図　久留米市の地形・地質
（産業技術総合研究所地質調査総合センター「20 万分の 1 日本シームレス地図」一部改変）

3）気候

本市は、内陸型の有明海気候区に属します。年間平均気温は 16.3℃、年間降水量は 1,949.4 ㎜で福岡県内では暖かく雨が多く、夏と冬の気温格差は比較的大きい地域です。

１～２月の寒冷期の平均気温は５～８℃であるのに対し、７～８月の盛夏期の平均気温は 27 ～ 29℃程度となっています。平成 30 年（2018 年）には最高気温 35℃以上の「猛暑日」が年間 44 日に及び、全国で最多となりました。

降水量は、６～７月の梅雨時期に集中しますが年変化が大きく、近年では豪雨による浸水被害に見舞われることが多くなっています。特に、筑後川への同流地点付近では、中小河川の内水氾濫が頻発しています。また、市街地部では、緑地の減少やアスファルト舗装の増加によるヒートアイランド現象による気温の上昇、さらには近年、頻発するゲリラ豪雨などによって、小規模で局所的な浸水被害が発生しています。

耳納山地では、平成３年（1991 年）の台風や平成 24 年（2012 年）の豪雨の際には土砂災害や風倒木が発生しており、現在でも表層が流出しやすい状況にあります。

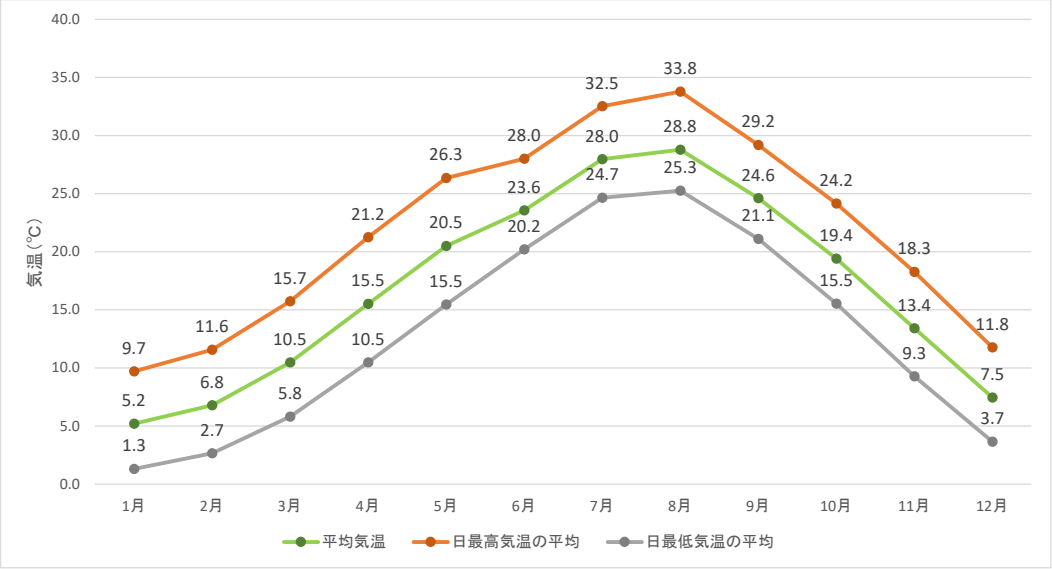


図　久留米市の気温

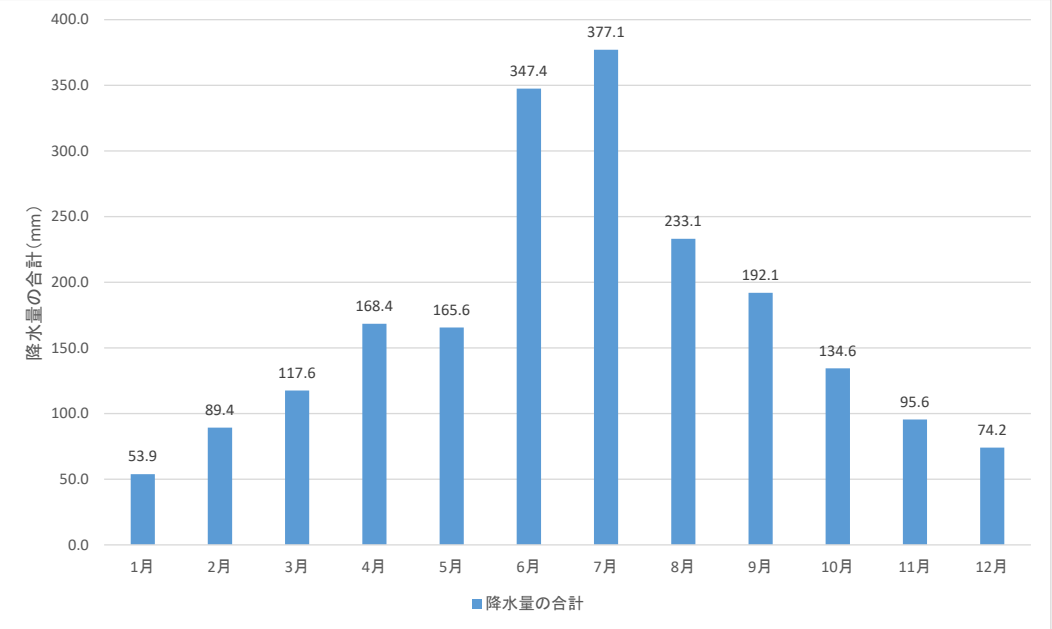


図　久留米市の降水量

4）動植物

本市は、筑後川や耳納山地に代表される水と緑に囲まれた環境にあり、そこには多くの動植物が生息しています。生物の多様性は本市の特徴でもある農業の発展とも大きく関わっており、色々な恵みをもたらしています。一方で、環境省・福岡県が発行しているレッドデータブックに掲載されている貴重な動植物の生息も確認されており、環境の保全も課題となっています。

①筑後川流域

本市が位置する筑後川中流域には、水際にエビモ、ヤナギモなどの沈水（ちんすい）植物、ヤナギタデ、ミゾソバなどの湿性植物、低水敷にツルヨシ群落、高水敷にはオギ群落が広く分布し、水際の植生も多様で、これらのイネ科を営巣地として繁殖しているカヤネズミも生息しています。潮の干満差が大きい下流域の汽水（きすい）域では、国内では有明海にのみ生息しているエツが５～８月に遡上し、産卵します。高水敷には九州北部では希少なセイタカヨシ群落も分布しています。川岸にはオオタチヤナギ、エノキなどの高木が点在しています。河床には、早瀬で産卵するアユ、緩流域を好むウグイ、ギンブナなどが生息し、抽水植物に産卵するオヤニラミ、抽水（ちゅうすい）・沈水植物が繁茂する場所には、ミナミメダカなどが観察できます。平野部はクリークやため池が多く、タコノアシやオニバスなどの植物や、カササギ・オオヨシキリなどの野鳥のほか、ニッポンバラタナゴや福岡県内の筑後川水系で唯一久留米に生息しているカワバタモロコなどの低平地のクリーク特有の希少な魚がみられます。また、田主丸町域の耳納山地からの伏流水が流れる用水路では、市指定天然記念物のヒナモロコが生息しています。

ため池（十連寺公園）

ヒナモロコ

カササギは、主に市域の南西部に生息していますが、荒木町、大善寺町、安武（やすたけ）町、三潴町、城島町が生息地として国の天然記念物に指定されています。

②高良山周辺

耳納山地の西端に位置する高良山周辺では、コジイを主体とする常緑高木林のシイ林の自然植生やクスノキ人工林が見られます。また、シダ植物の宝庫でもあり、ここを基産地とする種にコウラカナワラビがあります。国の天然記念物に指定されているモウソウキンメイチクや県の天然記念物に指定されている大樟、さらに、市指定天然記念物であり、市花でもあるツツジの群生地も見られます。昆虫ではクロセセリ、メスアカムラサキ、サツマニシキ、ヒメクダマキモドキなどが生息し、鳥類ではオオタカ、チュウヒ、ハヤブサなど104種の鳥類が観察できます。哺乳類は16種が生息しており、福岡県により高良山鳥獣保護区が指定されています。

③「優れた生態系を有する地域」と「生物多様性保全上重要な里地里山」

本市では、平成 20 年度（2008 年度）～ 22 年度（2010 年度）に実施した自然環境調査を踏まえ、平成 29 年（2017 年）に作成した『くるめ生きものプラン（久留米市生物多様性地域戦略）』において、「優れた生態系を有する地域」を 5 地区（城島町浮島（旧河道内の低湿地）、広川河口、高良山周辺、鎮西湖、筑後川中流域（恵利堰周辺））選んでいます。

また、平成 27 年（2015 年）には、環境省による「重要里地里山 500」選定において、「生物多様性保全上重要な里地里山」の一つに竹野地区が選定されています。

また、本市は、「福岡県立自然公園条例」に基づいて、筑後川や耳納山地が筑後川県立自然公園として指定を受けており、その総面積は 4,881ha で、市域面積の 21％を占めています（「平成 30 年度（2018 年度）版久留米市環境調査結果」より）。その他、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に基づいて、高良山鳥獣保護区 1,186ha 及び狩猟禁止区域として、久留米（1,200ha）、西牟田（350ha）、久留米東部（724ha）、筑後川河川敷（300ha）の 4 地区が設定されています。さらに、「森林法」に基づいて、本市の森林面積 3,357ha の 47.1％を占める 1,582ha が、保安林に指定されています（「久留米市環境基本計画」（平成 26 年度（2014 年度））より）。

（2）社会環境

1）市町村合併

本市は、明治 22 年（1889 年）４月１日に、全国 30 市とともに日本で初めて市制を施行しました。令和元年（2019 年）には市制 130 周年を迎えています。市域は旧久留米とその城下町を中心とし、人口 24,750 人でスタートした全国最小の市でしたが、その後、近隣市町村との計 10 回にわたる合併、そして、平成 17 年（2005 年）２月の過去最大となる広域合併を経て人口 30 万人を超える新・久留米市が誕生しました。また、平成 20 年（2008 年）４月には、九州では県庁所在地以外で唯一の中核市となりました。福岡県南部の中核都市として発展しています。

図　市域の変遷（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

表　市域の変遷（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

合併市町村	合併年月日	人口	世帯数	面積
市制施行	明治 22 年 4 月 1 日	24,750 人	4,262 世帯	2.66 ㎢
鳥飼村	大正 6 年 10 月 1 日	46,035 人	8,851 世帯	12.45 ㎢
節原村	大正 12 年 8 月 1 日	58,699 人	11,771 世帯	16.46 ㎢
国分町	大正 13 年 11 月 1 日	73,423 人	14,774 世帯	24.23 ㎢
御井町	昭和 18 年 10 月 1 日	99,762 人	19,041 世帯	28.85 ㎢
合川村 山川村 上津荒木村	昭和 26 年 4 月 1 日	114,943 人	23,450 世帯	49.41 ㎢
高良内村	昭和 26 年 6 月 1 日	120,762 人	24,323 世帯	62.69 ㎢
山本村 宮ノ陣村	昭和 33 年 9 月 1 日	142,443 人	32,093 世帯	80.18 ㎢
草野町	昭和 35 年 7 月 1 日	147,115 人	34,989 世帯	89.30 ㎢
筑邦町	昭和 42 年 2 月 1 日	180,991 人	47,485 世帯	113.40 ㎢
善導寺町	昭和 42 年 4 月 1 日	189,288 人	49,726 世帯	123.93 ㎢
田主丸町 北野町 城島町 三潴町	平成 17 年 2 月 5 日	305,948 人	114,426 世帯	229.96 ㎢※

※面積計測方法の変更により平成 26 年 10 月 1 日までは 229.84 ㎢

2）人口の動向

本市の人口は、市制施行後の市町村合併等により増加し、昭和 26 年（1951 年）の合併で 120,762 人、昭和 42 年（1967 年）の善導寺町との合併では 189,288 人となりました。その後、人口 20 万人を超え、平成 17 年（2005 年）の広域合併で 305,948 人となりました。

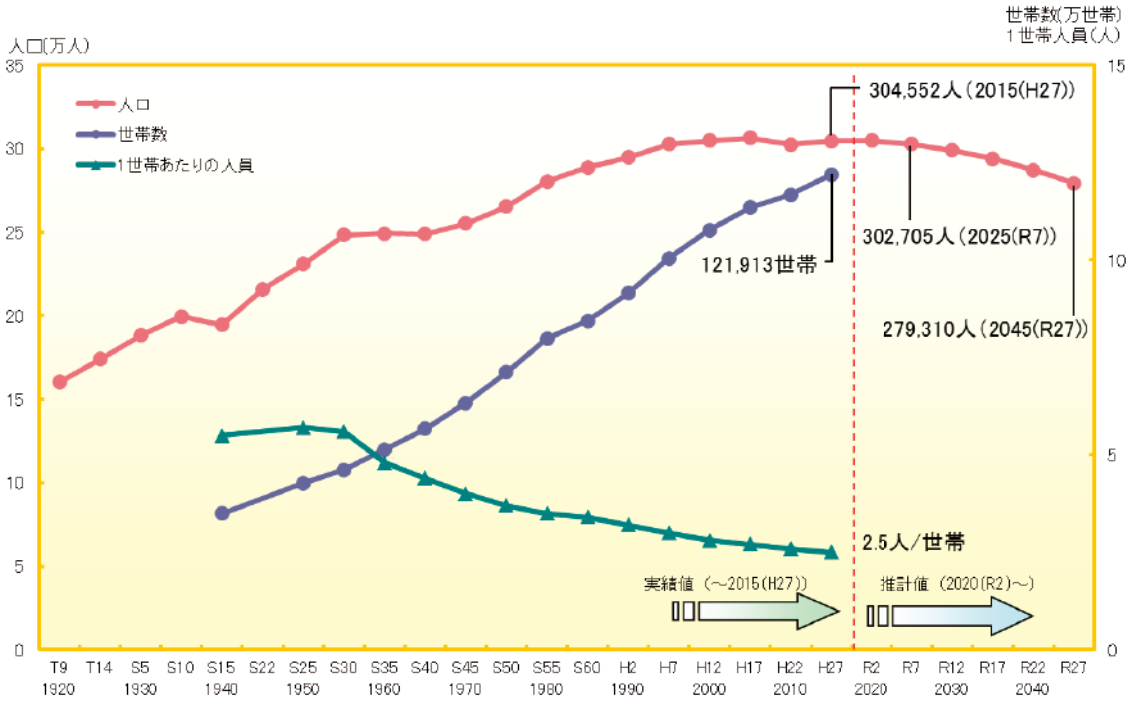
その後は減少に転じており、今後、本格的な人口減少が予想されています。

また、65 歳以上人口の割合を示す高齢化率は 20%を超え、年々増加傾向にあります。

①人口・世帯数の推移

本市の人口は、大正 9 年（1920 年）以降、一貫して増加し、平成 27 年（2015 年）時点で 304,552 人となっています。しかしその後、減少に転じており、国立社会保障・人口問題研究所による推計では、令和 7 年（2025 年）には 302,705 人、令和 27 年（2045 年）には 279,310 人になることが予想されています。今後、本格的な人口減少社会を迎えることになりますが、本市では、人口 30 万 5 千人を維持するために、様々な政策に取り組んでいます。

1 世帯あたりの人員は、昭和 25 年（1950 年）のピーク時には 5.7 人でしたが、平成 27 年（2015 年）時点で 2.5 人に減少しています。一方、世帯数は増加が続いており、平成 27 年（2015 年）時点で 121,913 世帯となっています。全国の動向と同じく、核家族化や単身世帯の増加の傾向が窺えます。



※現在の久留米市域の人口の推移であり、過去の値は合併旧町村人口を組み入れている

▲　市全域の人口・世帯数の推移

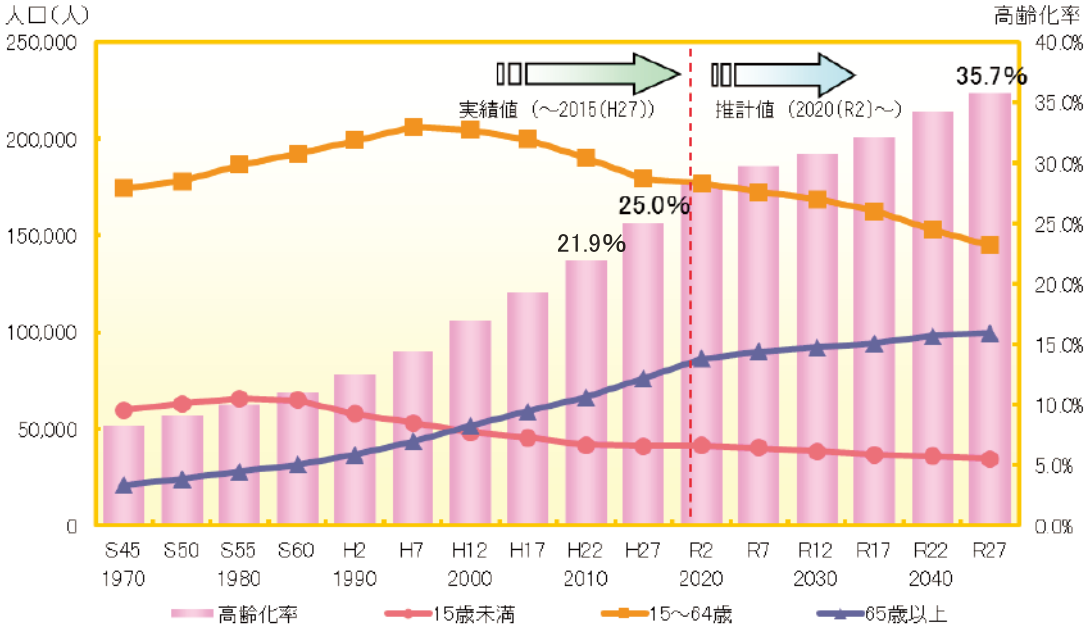
資料：平成 27 年以前は国勢調査、平成 32 年以降は平成 27 年国勢調査を基準とした国立社会保障・人口問題研究所推計値

図　人口・世帯数の推移（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

②３区分別人口の推移

本市の生産年齢人口（15 ～ 64 歳）は、平成７年（1995 年）をピークに減少し、今後も減少が続くと予想されています。

一方で、高齢者人口（65 歳以上）は、一貫して増加し、平成 12 年（2000 年）には年少人口（0 ～ 14 歳）を上回っています。平成 22 年（2010 年）には、高齢者人口の占める割合が全体の 21％を超える「超高齢社会」に突入しています。高齢化率は今後も増加が続くことが見込まれていますが、高齢者人口は、概ね横ばいになることが予想されています。



▲　久留米市の年齢階層別人口の推移

資料：平成 27 年以前は国勢調査、平成 32 年以降は平成 27 年国勢調査を基準とした国立社会保障・人口問題研究所推計値

図　３区分別人口の推移（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

③自然動態（出生者数と死亡者数の差）と社会動態（転入者と転出者の差）の推移

横ばい傾向が続いていた出生者数が減少傾向に転じる一方で、死亡者数は増加傾向が続いており、平成 23 年度（2011 年度）に死亡者数が出生者数を上回って以降、その差が拡大しています。

平成 25 年度（2013 年度）以降、４年連続で転入者が転出者を上回る転入超過の状態が続いていましたが、平成 29 年度（2017 年度）に再び転出超過に転じています。

3）産業

本市は肥沃（ひよく）な筑紫平野に恵まれていることから、古くから農業が盛んで、現在では九州有数の農業産出額を誇っています。一方で、工業、商業、医療についても筑後地域の中心的な都市として発展を続けており、こうした近代以前の産業と、それ以降の新たな産業の進展が、本市発展の原動力となっています。産業の近代化が進展する一方で、江戸時代や明治時代から続く伝統産業も営まれ続けていることも、本市の大きな特徴になっています。

①就業人口

平成 27 年（2015 年）の国勢調査をみると、15 歳以上の就業人口の総数は 141,546 人で、平成 17 年（2005 年）から約 4,000 人減少しています。就業人口の総数に占める第 1 次産業の割合が 5.8%、第 2 次産業の割合 20.4%、第 3 次産業の割合が 73.8%となっており、第 1 次産業の割合が減少傾向にある一方で、第 3 次産業が増加、第 2 次産業は減少傾向が止まり平成 27 年（2015 年）に増加しています。産業別にみると、医療・福祉、卸売業・小売業がともに 15.8%と最も多く、次いで製造業が 12.7%と続いています。

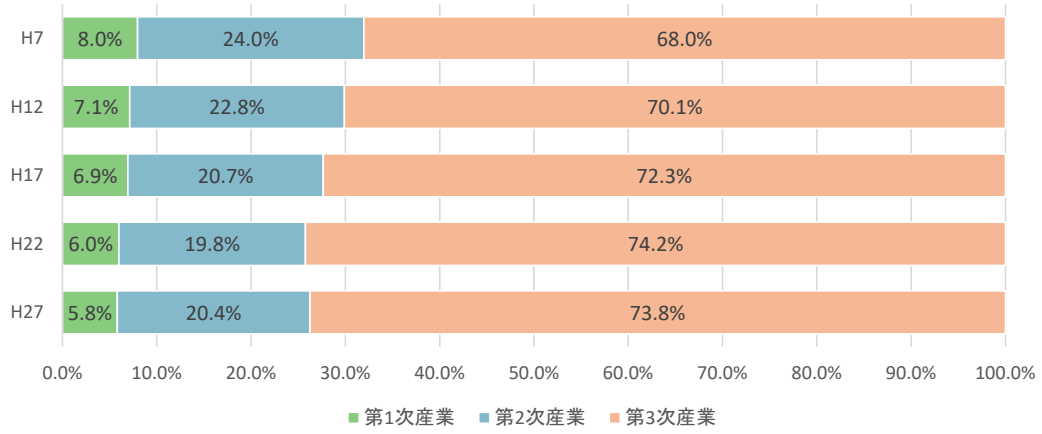


図　産業別就業人口の推移（資料：国勢調査）　注：分類不能の産業を除いて割合を算出

②農業

本市の農業は、肥沃な土壌を持つ広大な筑紫平野と筑後川、筑後川水系の中小河川、用水、クリークなどに支えられて発展してきました。現在、米、麦、野菜、花き、花木、果実，畜産など、多様な農産物が生産されています。

就業人口において減少が続く第一次産業ですが、本市の農業産出額については、平成 30 年（2018 年）市町村別農業産出額（農林水産省公表値）によると 297.8 億円にのぼり、県内で 1 位、九州沖縄で 11 位、全国で 25 位となっています。品目別では、野菜や種苗苗木類の額が多いことが特徴となっていますが、乳牛の飼育数や、ぶどうの出荷数なども県内 1 位を誇ります。

平成 27 年（2015 年）の農林業センサスによると、農林業経営体数は 3,365 経営体で、平成 22 年（2010 年）からの 5 年間で 626 経営体減少しています。このうち農業経営体数は 3,349 経営体、林業経営体数は 16 経営体となっており、平成 22 年（2010 年）からそれぞれ 15.5%、38.5%減少しています。

また、農業就業人口における 65 歳以上の占める割合は、平成 22 年度は 47.8%であったものが、平成 27 年度には 51.3%に増加しており、農業就業者の高齢化が進んでいます。

そのような中、近年は、労働力や後継者不足を解消するため、法人化する農業経営体や、食品加工・流通・販売などの 6 次産業化に取り組むなど、農業経営の多角化を行う農業者も増えてきています。

●床島用水

筑後川は豊富な水量を誇りますが、川底が深く流れが急なため引水が難しく、筑後川右岸の北野町周辺では水不足が慢性化していました。正徳 2 年（1712 年）、久留米藩士の草野又六と鏡村の高山六右衛門ら 5 人の庄屋たちによって床島用水が開削され、宮ノ陣地区全域、北野町全域、小郡市の一部、大刀洗町の大部分の古田、新田約 2,000ha が潤ったとされます。現在では 393 ㎞に及ぶ水路により、約 3,000ha に及ぶ水田の灌漑用水となっています。

恵利堰

床島用水

●三潴用水・安武用水

安武・三潴・城島地区の低地にはクリークが広がっており、江戸時代には広川町から取水し三潴町へ導水する千間溝（せんげんみぞ）が開削されました。合わせて八女丘陵には溜池群を造り、現在でも灌漑用水として利用されています。明治・大正時代には、筑後川からポンプ取水することで三潴用水や安武用水が整備され、耕地整理が進みました。昭和 8 年（1933 年）、三潴町高三潴に建設された赤煉瓦造りの旧三井寺ポンプ所及び変電所（国登録有形文化財）は、長閑（のどか）な田園風景の中にあり、地域の開発の歴史を象徴しています。

小学校で受け継ぐ「とこしま堰物語」

金島小学校は、床島堰づくりを決意し、やりとげた高山六右衛門、秋山新左衛門、鹿毛甚右衛門（かげじんうえもん）の 3 人の庄屋が校区にいた小学校です。総合的な学習の時間で、筑後川や床島堰について学習を進め、「五庄屋」とともに堰づくりを支えた農民たちにも目を向けながら、創作劇「とこしま堰物語」をつくりあげ、20 年以上にわたって上演を続けています。この劇づくりは、金島小学校の伝統になり、床島用水づくりの思いが受け継がれています。

●久留米つばき・久留米つつじ

耳納山地の北麓は、江戸時代から植木・苗木の生産が盛んな地域でした。元禄年間（1700年前後）に始まり、現在も全国で有名な植木・苗木の生産地です。田主丸町は日本三大植木生産地の１つに数えられ、特に久留米つばきは生産量、新品種開発の豊富さとも全国有数です。

また、市の花である久留米つつじは、江戸時代に久留米藩の馬術師範であった坂本元蔵（さかもともとぞう）が生みの親であり、元蔵は100種類以上もの品種を作り出しました。現在もそのいくつかが久留米つつじの優秀な品種として育てられています。

「市の木」である久留米つばき、「市の花」である久留米つつじは、本市を代表する植物です。

③工業

本市の工業は、近代の地下足袋生産から発展したタイヤ・ゴム靴などのゴム製造業が盛んです。立地の良さと交通利便性の高さから企業立地が進み、平成25年（2013年）以降、製造品出荷額等は3,000億円を超えています。他方、古くから繊維産業など伝統的な製造業も盛んな地域です。

現在は、本市が有する様々な強み･特色や潜在力を積極的に活用し、産官学金のネットワーク形成や新技術の研究開発、新産業の創出を促進するとともに、バイオ関連産業など、ゴム産業に続く新たな基幹産業・次世代産業の創出、育成、集積を推進しています。

シーボルトと久留米つばき

久留米つばきの代表的な品種の一つに「正義（まさよし）」があります。「正義」は八重咲きで濃い紅色に大小の白い模様が入っています。1830年にドイツの医師で博物学者のシーボルトがヨーロッパに持ち帰ったところ、人々に「冬のバラ」と褒め称えられ、つばきブームを巻き起こし、「ドンケラリー」の名前で世界中に広がったといわれています。現在、本市の草野町には、樹齢300年など「正義」の古木が6株ありますが、そのいずれかが「ドンケラリー」の母株といわれています。

坂本元蔵（1785 ～ 1854）

坂本元蔵は久留米藩士でした。江戸時代の終わりごろ、久留米では藩士や町人の間でツツジの盆栽が流行っており、元蔵はツツジの栽培のみならず、品種改良にも取り組みました。品種改良を重ねた結果、偶然庭の苔の上に散ったツツジの種が発芽していることに気づき、刻んだ苔の上に種をまいて新しい品種を作る方法に成功しました。元蔵は、「久留米つつじの生みの親」といわれています。

●ゴム産業

日本で初めてゴム産業が興った「日本の履物・ゴム産業発祥の地」と言われる本市は、ゴムの街として発展してきました。特に「ゴム３社」（現株式会社ブリヂストン、アサヒシューズ株式会社、株式会社ムーンスター）と呼ばれる近代に創業した企業が、本市のものづくり産業をリードしています。平成 26 年（2014 年）の産業（中分類）別製造品出荷額等をみると、ゴム製品製造業が最も多く、約 772.4 億円で全体の 22.4%を占めています。次に出荷額が多い輸送機械製造業の約 488.9 億円に大きな差をつけており、依然としてゴム産業が本市の工業を代表する産業と言えます。

●企業立地

本市にはＪＲ鹿児島本線・久大本線・九州新幹線、西鉄天神大牟田線、九州自動車道など九州の主要な交通網が通り、九州最大の都市・福岡市の都市圏と隣近接し、アクセス利便性も高いことから、製造業をはじめとする多くの事業者が本市に進出し、近年では賃貸オフィスなども増加しています。また、人口約 30 万人の中核都市で、大学、高専があるという利点など、優れた立地環境を活かし、近年、積極的な企業誘致を行っており、平成 22 年度から令和元年度の 10 年間で、製造業など 24 社、オフィス企業 14 社の立地・進出につながっています。

●伝統的な製造業

江戸時代後期に普及した久留米絣や久留米縞などの繊維産業、明治時代から筑後川の水を利用して発展してきた酒造業、このほかにも籃胎漆器や瓦、和傘、櫨蠟（はぜろう）などの伝統的な製造業が現在も続いています。

詳しくは、後述の文化的環境の中で紹介します。

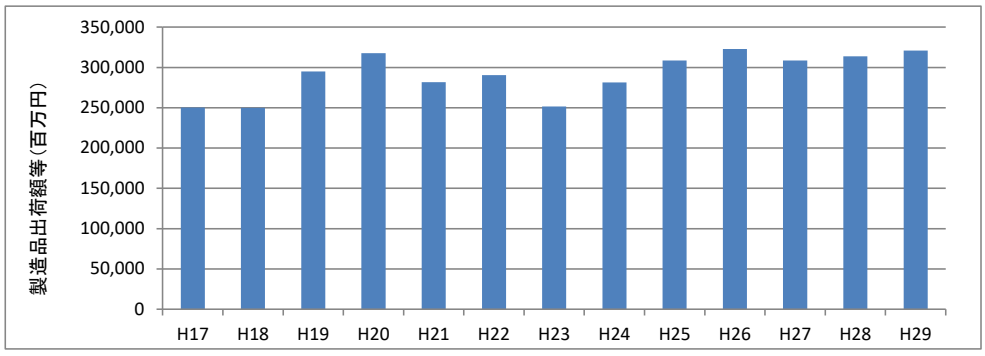


図　製造品出荷額等の推移　（資料：工業統計調査）

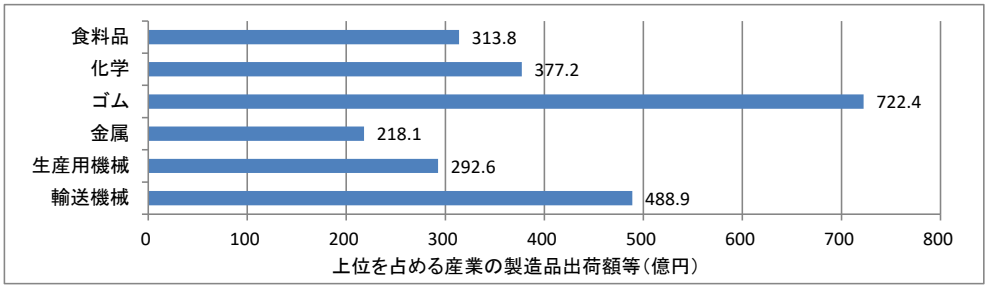


図　産業（中分類）別製造品出荷額等の上位を占める産業（平成 26 年（2014 年））（資料：工業統計調査）

④商業

本市は、藩政期においては久留米藩 21 万石の城下町として商業が発展し、明治時代になると筑後地域の政治・経済の中心都市としてさらに成長してきました。大正時代から第 2 次世界大戦後の高度経済成長期にかけては商工業都市として発展してきました。近年は郊外大型店舗の立地も進んでいますが、市の中心部には多くの商業店舗が集積し、中心商店街を形成しています。

第三次産業の産業分類就業者の割合をみると、卸売・小売業と医療・福祉関連の就業者数が多く、「商都」「医療のまち」としての本市の特性が、現在も息づいていることが分かります。

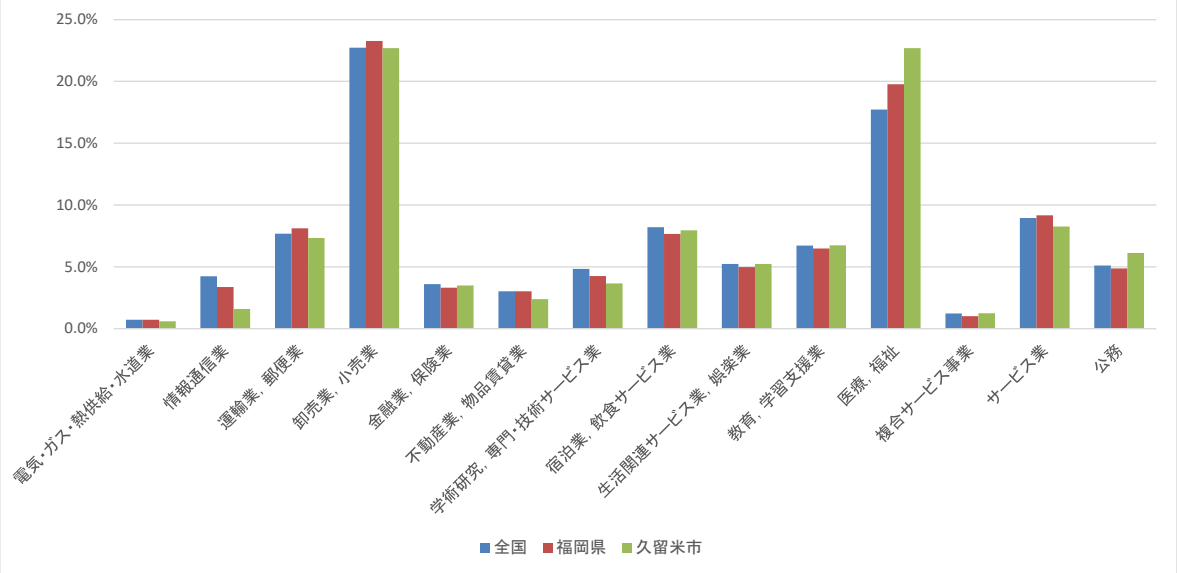


図　産業分類別就業者（第三次産業のみ）の割合（資料：国勢調査）

●医療

昭和 3 年（1928 年）の九州医学専門学校（現久留米大学）の開校以降、本市は全国トップレベルの医師数と医療機関が集積した高度医療都市となり、現在、全国的に不足している小児科・産婦人科数も全国的に高い水準にあります。次世代医療品として期待される核酸医療品開発などバイオ産業の集積も進んでおり、全国でも有数の研究拠点となっています。現在、医療を核としたまちづくりを目指しており、医療観光の環境整備を進めるとともに、市外からの移住者の獲得も目指しています。

「医者のまち」久留米

九州一の大河筑後川が流れる本市では、かつて、その川沿いに「日本住血吸虫病」という病気が広がり、多くの人々が亡くなり、苦しみました。この病気の原因の一つであった宮入貝を発見した九州帝国大学（現九州大学）の宮入慶之助、本市に来て研究を重ねたハンター博士らの尽力により根絶に成功しました。

このような経験とともに、昭和 3 年（1928 年）、九州医学専門学校（現久留米大学医学部）の設立をきっかけに医療施設の立地が進み、久留米は「医者のまち」と呼ばれるようになりました。

現在、市内には 35 の病院と 300 を超える診療所など多くの医療機関があり、人口 1,000 人あたりの医師数は全国トップクラスです。さらに、高度な医療や検査機能を有する病院があり、救急医療体制が整っているなど、生活圏を越えた九州北部の広域医療拠点となっています。

4）観光

本市には、筑後川や耳納山地に育まれた豊かな自然をはじめ、人々の営みの中で生み出された歴史遺産など、多様な観光資源があります。久留米ラーメンや久留米焼きとり、筑後うどんなどの食文化、ブドウやイチゴなどのフルーツ観光、装飾古墳や筑後国府跡、高良大社、水天宮、大善寺玉垂宮、鬼夜（おによ）などの歴史遺産、石橋文化センターや久留米市美術館などの文教施設など様々です。城島町の酒蔵開き、久留米つつじマーチ、水の祭典久留米まつり、筑後川花火大会など四季折々のイベントも多く、地域資源を活かした体験型観光プログラムの久留米まち旅博覧会など、盛んに観光の機会が提供されています。本市は公共交通機関や道路網が整備され、交通利便性が高いことから、福岡都市圏をはじめ、九州各地から多くの人々が訪れています。

①観光入込客数の推移

平成 17 年（2005 年）以降の観光入込客数は、第 3 回Ｂ－１グランプリ in 久留米が開催され、道の駅くるめがオープンした平成 20 年（2008 年）に初めて 500 万人を超えました。平成 23 年（2011 年）には、東日本大震災の影響によるイベント中止などの減少要因があったものの、特別展「没後 100 年青木繁展」が開催されたほか、九州新幹線の開通の影響もあり、530 万人に達しています。特別展「金閣・銀閣の寺宝展　雪舟、等伯、宗達、そして若冲」が開催された平成 25 年（2013 年）年には約 515 万人、平成 28 年（2016 年）には総合文化施設である久留米シティプラザが開館するなどの要因もあり、平成 29 年（2017 年）には 591 万人を超えるなど、堅調な増加を見せています。

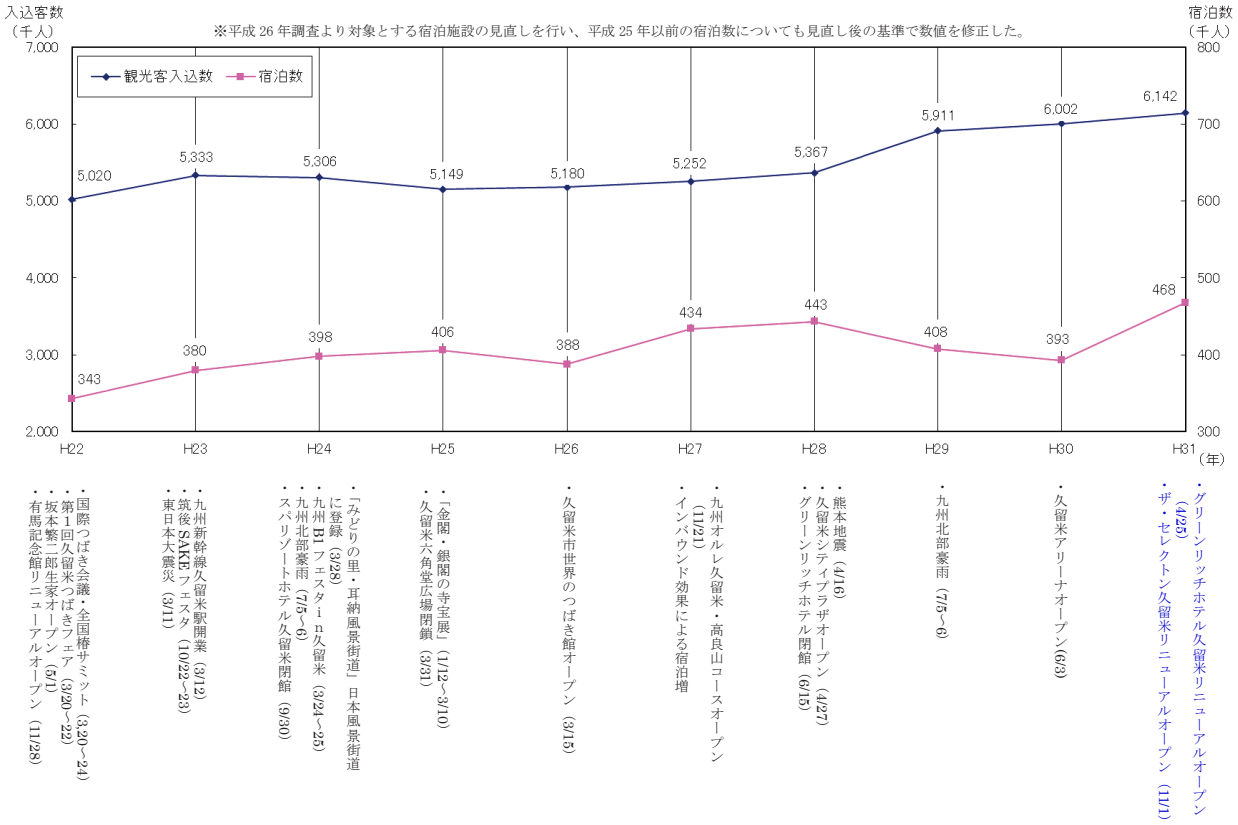


図　観光入込客数の推移（資料：平成 31 年久留米市入込客推計調査）

②観光の目的

平成 31 年（2019 年）の目的別観光入込客数を見てみると、全体の 64.6%が「一般行楽」を目的としています。これに次いで、「祭・行事」が全体の 23.8%、「社寺・文化財・史跡」が全体の 6.3%と続きます。祭・行事も歴史・文化に起源をもつものも多いことから、観光客の約 30%が、観光を通して本市の歴史遺産に触れていることが窺えます。

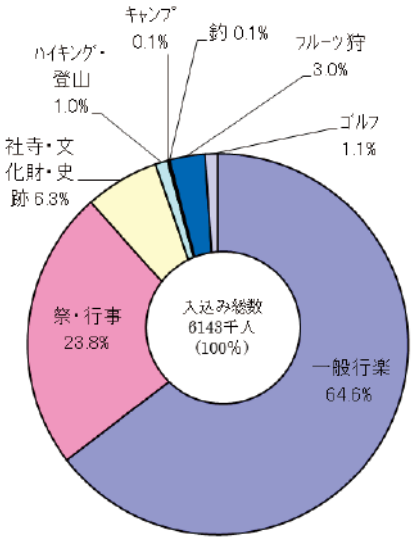


図　目的別入込客数（平成 31 年（2019 年））
（資料：平成 31 年久留米市入込客推計調査）

③施設別及び四季別の状況

施設別利用状況をみると、平成 31 年（2019 年）に最も利用者数が多かったのは「久留米市美術館」で、年間約 13.2 万人が訪れています。このほか、「鳥類センター」約 12.2 万人、「久留米市世界のつばき館」約 5.4 万人、「久留米サイクルファミリーパーク」約 4.1 万人、「山辺道文化館」約 1.3 万人、「有馬記念館」約 5 千人、「草野歴史資料館」約 3 千人の年間入館者・入園者数となっています。

四季別にみると、春には久留米つつじ、久留米つばきなどの花々が見頃を迎え、夏には水の祭典久留米まつりや西日本最大級の筑後川花火大会といった大規模イベントがあります。秋にはコスモス、耳納北麓の紅葉、冬には水天宮・高良大社などへの初詣、城島酒蔵びらきや節分などがあり、四季を通じてバランスの取れた入込となっています。

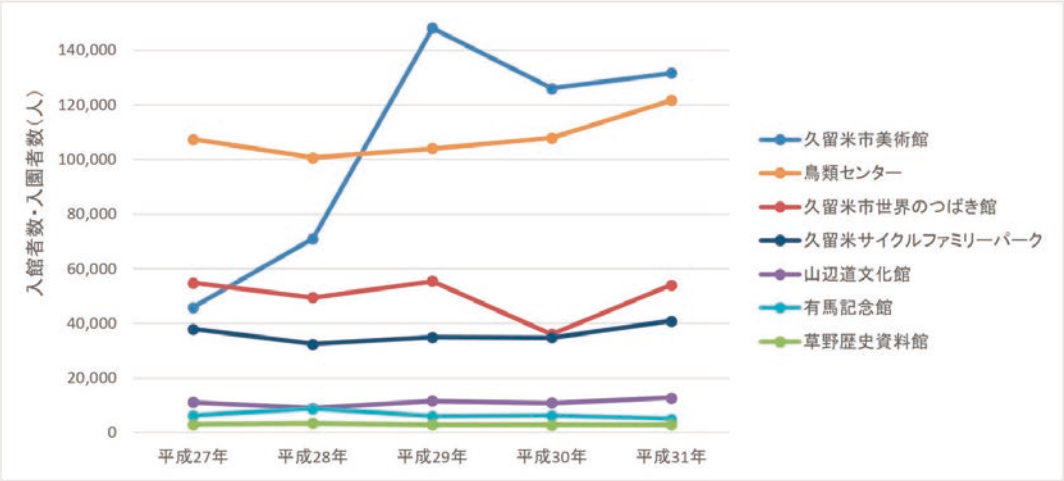


図　施設別入館者・入園者数の推移（「平成 31 年久留米市入込客推計調査」を基に作成）

久留米まち旅博覧会

久留米まち旅博覧会は、九州新幹線全線開業に向けた観光商品づくりとして平成 20 年（2008 年）に開始した久留米市、小郡市、大川市、うきは市、大刀洗町、大木町からなる久留米広域連携中枢都市圏の事業です。令和元年（2019 年）の「秋のまち旅」で 15 回目を迎えました。

「芸術」、「ものづくり」、「歴史」、「農」、「発酵文化」、「医とスポーツ」をテーマに、80 のまち旅（プログラム）を実施しており、地域資源を活用した観光振興に関わる市民の裾野を広げています。本市の重要な観光商品として確立しており、着地型観光の先進的事例として、全国から多くの視察者を迎える事業ともなっています。

5）土地利用

久留米市における土地利用の状況は、都市的土地利用が約２割、自然的土地利用が約７割を占めています。平成 29 年度（2017 年度）では、市域のうち農用地が 37.4%（8,600ha）と最も多く、森林 14.7%（3,380ha）、水面・河川・水路 9.5%（2,181ha）、道路 6.9%（1,591ha）、宅地 18.0%（4,149ha）、その他 13.5%（3,095ha）となっています。これらを平成 25 年（2013 年）と比較すると、農用地（▲ 160ha）や森林（▲ 84ha）、水面・河川・水路（▲ 4 ha）、道路（▲ 29ha）が減少している一方で、宅地（＋ 51ha）が増加しています。

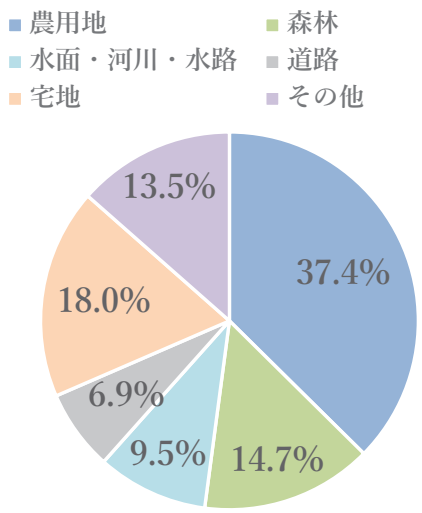


図　土地利用（平成 29 年度（2017 年度））
（資料：久留米市新総合計画第 4 次基本計画）

①都市的土地利用

都市的土地利用は、全市域を都市計画区域に指定し、概ね良好な土地利用を図っています。

②自然的土地利用

筑後川沿いには、肥沃な土壌と豊富な用水を活かした水田が形成され、耳納山地北麓の扇状地上には、果樹や植木などの畑地が続いています。筑後川の一部や耳納山地は、「福岡県立自然公園条例」に基づき、筑後川県立自然公園に指定されており、貴重な自然環境が保全されています。

本市の農業振興地域は、市街化区域、用途地域、筑後川、耳納山地の一部を除き、概ね市域全体に指定されており、幹線道路沿線や既存集落地を除き農用地区域が定められ、農地の保全が図られています。

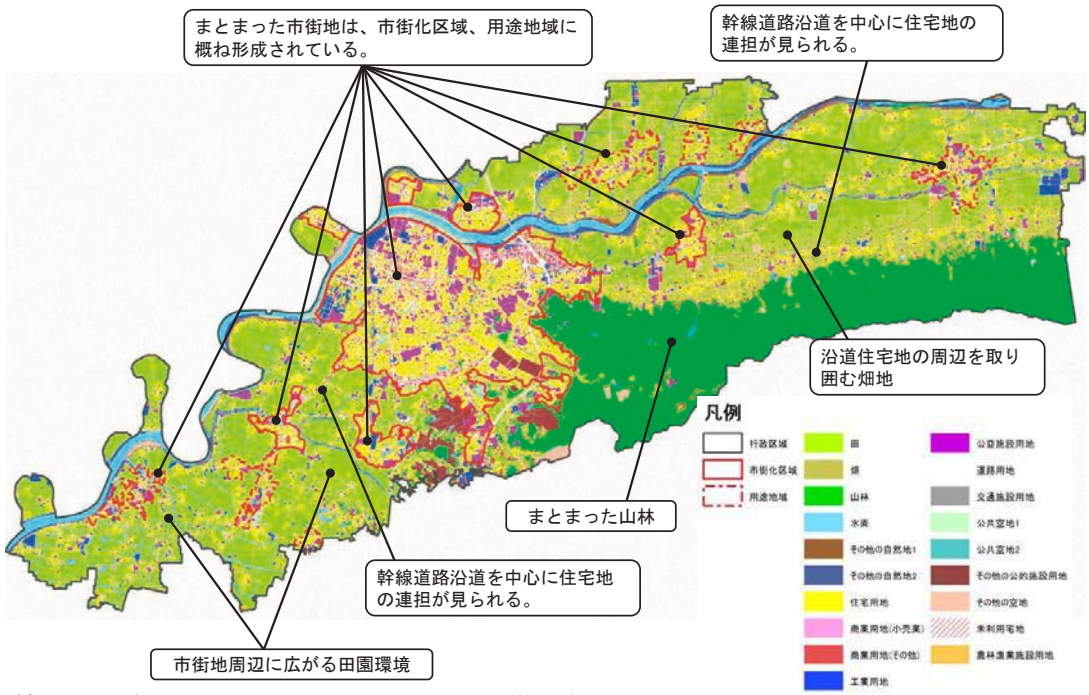


図　土地利用現況（出典：久留米市都市計画マスタープラン）

6）交通

本市は、九州各地をつなぐ交通の合流地点に位置しており、九州各都市に短時間で到達できる交通網を有しています。九州自動車道や大分･長崎自動車道が交差する鳥栖ジャンクションに近接しているほか、国道３・209・210・264・322・385 号及び主要地方道などの幹線道路が、市内を網目のように走っています。

鉄道は、近代以降、多くの軌道や鉄道が整備され、現在では九州新幹線をはじめ、JR 鹿児島本線･久大本線、西鉄天神大牟田線･甘木線の駅が多数所在し、鉄道網が充実しています。通勤や通学の手段になっているほか、九州圏内のみならず本州へも交流圏が拡大しています。

路線バスは 16 路線が運行され、市街化区域内では比較的充実した路線網を有しています。周辺部では生活支援交通として、よりみちバス「コスモス号」（北野地域）や「インガット号」（主に、城島地域）運行されています。

また、九州自動車道や国道３号をはじめとする幹線道路は、緊急輸送道路に指定されており、大規模災害時においては救助・救援活動や緊急物資の輸送などの機能を担っています。

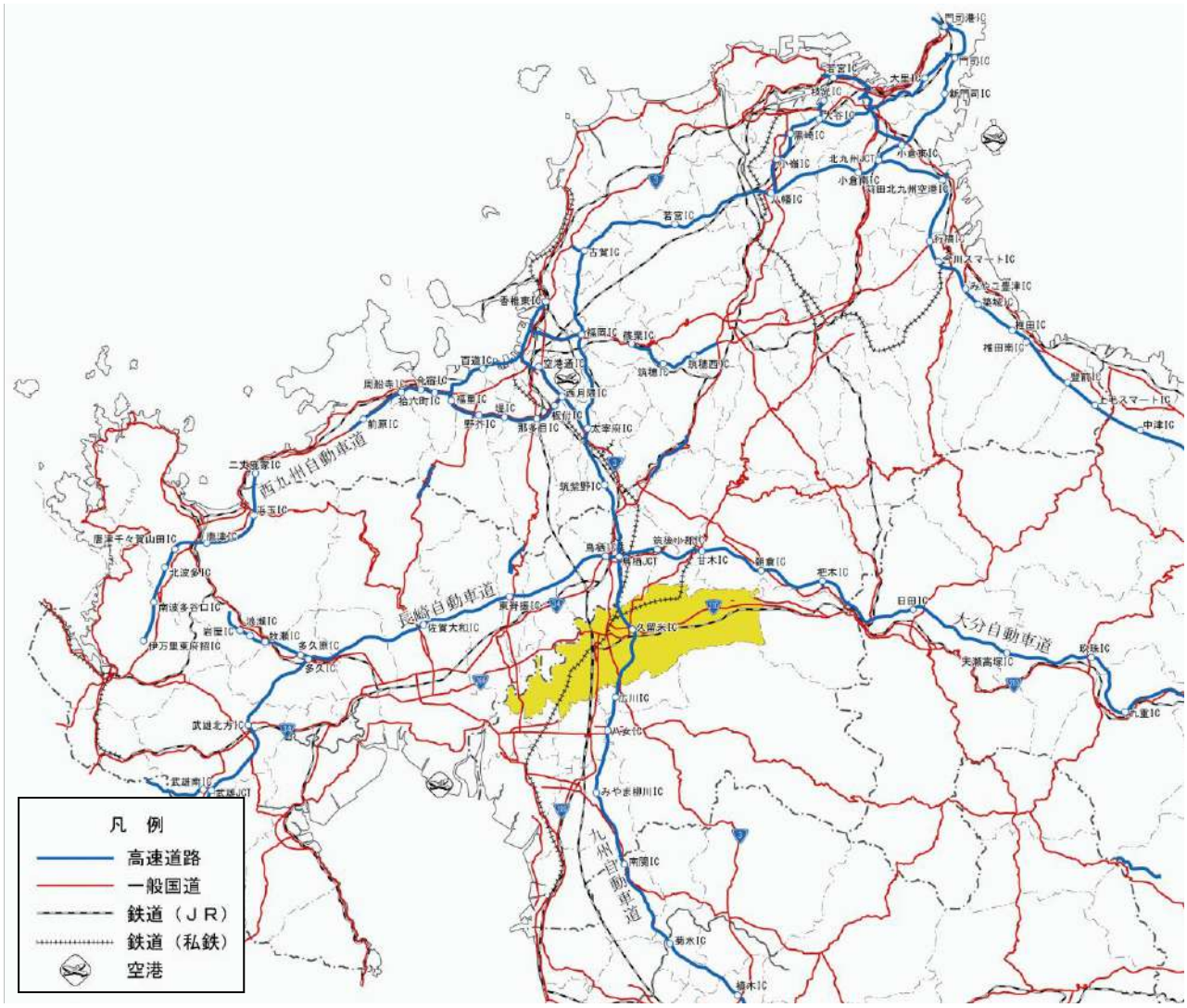


図　久留米市の交通網（出典：久留米市都市計画マスタープラン）